

(財) 大阪府埋蔵文化財協会調査報告書 第37輯

淡輪箱作海岸整備事業に伴う

山田海岸遺跡

—— 発掘調査報告書 ——

1 9 8 9

財団法人 大阪府埋蔵文化財協会

(財) 大阪府埋蔵文化財協会調査報告書 第37輯

淡輪箱作海岸整備事業に伴う

山田海岸遺跡

—— 発掘調査報告書 ——

1 9 8 9

財団法人 大阪府埋蔵文化財協会



遺跡全景（南から）

序 文

大阪湾岸部には古くからいくつかの製塩遺跡が知られています。山田海岸遺跡は数年前、海岸に張り出した崖面に焼土、炭の痕跡があることや、一部製塩土器が露出していることから発見された遺跡で、立地、発見遺物等の状況から製塩遺跡であることが予測、注目されていました。そして、今回初めて調査が行なわれたものです。

今回の調査結果については本報告書に詳しく記述しているところではありますが、古墳時代前期から奈良時代まで製塩が行なわれていたことを確認すると共に、その前後の時期についても生活痕跡を検出しました。とりわけ、土器製塩並びに製塩炉の変遷を窮い知る貴重な資料を得ることが出来たことは、大きな成果でした。このため、大阪府土木部港湾局並びに大阪府教育委員会をはじめとする関係各位のご努力により石敷製塩炉等の重要遺構の保存がはかられたことも記録しておきたいと思えます。

本報告書が古代製塩の実態解明の資料として大いに利用されることを願って止みません。

最後に調査の実施にあたり種々ご配慮いただきました大阪府土木部港湾局をはじめとする関係各位に謝意を表すると共に、特に貴重な人材を直接派遣いただいています近畿府県教育委員会、並びに大阪府下市町教育委員会に対して深謝申し上げます。

平成元年3月

財団法人 大阪府埋蔵文化財協会

理事長 浅野素雄

例 言

1. 本書は淡輪・箱作海岸整備事業予定地内に所在する、山田海岸遺跡の発掘調査報告書である。
2. 調査は大阪府港湾局の委託を受け、大阪府教育委員会の指導のもとに、財団法人大阪府埋蔵文化財協会が実施した。
3. 調査は大阪府埋蔵文化財協会調査課第1班（平成元年より第4班）技師、小川正純が担当し、主査玉井功、技師橋本高明、重金誠が補佐した。
4. 現地調査は2回に分けて実施され、第1次調査は昭和63年5月8日に開始し、同年9月30日に終了（但し、7・8月は海水浴場のため中断）し、第2次調査は平成元年1月13日に開始し、平成元年2月28日に終了した。
5. 調査の実施にあたっては、大阪府港湾局、大阪府立青少年海洋センター、岬町教育委員会および地元関係各位の協力を得た。
6. 遺構写真撮影は調査担当者、遺物写真撮影は小倉勝が行なった。
7. 調査は当協会の発掘調査規定により国土座標第VI系を基準に地区割りを設定して行なった。本文中に用いた座標もこれに従い、方位は座標北を指す。標高はT.P.で表示した。
なお、地区割りの大要は 第I章第3節に記した。
8. 本書で用いた呼称は、当協会の発掘調査規定により遺構の種類にかかわらず検出順に通し番号を付し、遺構の記号を記して種類とした。
今回の調査に使用した記号は以下の通りである。
OO 土坑 OP ピット OS 溝 OH 炉
9. 遺物図には通し番号を付し、本文中の遺物番号は遺物図、図版のそれに一致する。
10. 本書で用いた土壌色は、小川正忠・竹原秀雄編著「新版標準土色帖5版」（1976）による。
11. 本書の執筆は第I章を橋本、第II章および第III章第1・4節を小川、第III章第2・3節を小川・重金、第IV章を小川が執筆した。
編集は小川を主担とし、橋本、重金が補佐した。

本文目次

序文	
例言	
本文目次	
挿図目次	
図版目次	
表目次	
第I章 経過	1
第1節 調査に至る経過	1
第2節 調査の方法	1
第II章 位置と環境	3
第III章 調査成果	6
第1節 基本層序と微地形	6
第2節 製塩関連遺構と遺物	9
1. 製塩炉 2. 炉周辺の出土遺物 3. 建物 4. 土坑 5. 溝	
第3節 その他の遺構と遺物	24
1. 土坑 2. 溝	
第4節 包含層の遺物	26
第IV章 まとめ	30

挿図目次

第1図 地区割り模式図	2
第2図 岬町位置図	3
第3図 調査区位置図 (1/5,000)	4
第4図 周辺遺跡分布図 (1/20,000)	5
第5図 基本層序1 (上下1/80; 左右1/160)	7
第6図 基本層序2 (上下1/60; 左右1/120)	8
第7図 39-OH平面図 (1/30)	9

第8図	40-OH平面図1 (1/30)	10
第9図	40-OH平面図2 (1/40)	11
第10図	41-OH平面図 (1/30)	11
第11図	42-OH平面図 (1/30)	12
第12図	製塩関連遺構全体図 (1/100)	13~14
第13図	炉周辺出土遺物図1 (1/4)	16
第14図	炉周辺出土遺物図2 (1/4)	17
第15図	炉周辺出土遺物図3 (1/4)	18
第16図	建物模式図.....	19
第17図	24・25-OP断面図 (1/40)	19
第18図	24・30-OP・26-OS・29-OX出土遺物図 (1/4)	20
第19図	19-OOP・断面図 (1/30)	21
第20図	19A-OO出土遺物図 (1/4)	22
第21図	19B-OO出土遺物図 (1/4)	23
第22図	16-OS・45-OOP・断面図 (1/40)	26
第23図	16-OS出土遺物図 (1/4)	26
第24図	包含層出土遺物図1 (2/3)	27
第25図	包含層出土遺物図2 (1/4)	27
第26図	包含層出土遺物図3 (1/2)	28
第27図	包含層出土遺物図4 (1/4)	29
第28図	遺構全体図 (1/200)	31~32

図 版 目 次

巻頭図版1 遺跡全景（南から）

図版1 遺跡周辺

図版2 遺跡遠景（南から、西から）

図版3 遺跡全景（北から、南から）

図版4 遺跡全景（南から、2次調査区）

図版5 土層（東壁断面、中央畔断面）

図版6 製塩炉（39-OH、40-OH）

- 図版 7 製塩炉 (41-OH. 42-OH)
- 図版 8 土坑 (19-OO. 19A-OO遺物出土状況)
- 図版 9 遺跡全景
- 図版10 出土遺物 (第5層上層)
- 図版11 出土遺物 (第5層上層)
- 図版12 出土遺物 (第5層上層)
- 図版13 出土遺物 (第5層上層)
- 図版14 出土遺物 (第5層上層. 礫上層)
- 図版15 出土遺物 (第5層礫上層)
- 図版16 出土遺物 (第5層礫層)
- 図版17 出土遺物 (第5層礫層. 下層)
- 図版18 出土遺物 (第5層上層. 礫層. 礫上層. 29-OX. 19A-OO)
- 図版19 出土遺物 (製塩土器 I 類. 甕形製塩土器)
- 図版20 出土遺物 (19A-OO)
- 図版21 出土遺物 (19A-OO)
- 図版22 出土遺物 (19A-OO)
- 図版23 出土遺物 (19A-OO)
- 図版24 出土遺物 (19B-OO)
- 図版25 出土遺物 (19B-OO)
- 図版26 出土遺物 (19B-OO)
- 図版27 出土遺物 (19B-OO. 包含層)
- 図版28 出土遺物 (包含層. 16-OS)
- 図版29 出土遺物 (包含層. 24.30-OP. 26-OS. 29-OX)
- 図版30 出土遺物 (包含層)

表 目 次

製塩土器観察表

第 I 章 経 過

第 1 節 調査に至る経過

山田海岸遺跡は大阪府泉南郡岬町淡輪に所在する遺跡である。当遺跡は数年前、海岸に張り出した崖面に焼土・炭の痕跡があることや一部製塩土器が露出しているのを地元の郷土史愛好家によって発見された。通報を受けた大阪府教育委員会文化財保護課ではただちに現状を確認し、昭和61年3月刊行の大阪府文化財分布図に加えることによって周知の遺跡として認識されるようになった。

今回、大阪府港湾局によって関西国際新空港の関連事業として、淡輪・箱作環境整備事業が具体化することとなり、当事業の一環として当遺跡を含む岬町淡輪地区において、国道26号線から海岸への進入路の設置が計画された。

このような状況を踏まえて、進入路建設に先立って大阪府教育委員会は発掘調査が必要と判断を下し、その旨、大阪府港湾局に通知するとともに、山田海岸遺跡の取り扱いについて協議に入った。

協議を重ねた結果、淡輪・箱作環境整備事業が関西新空港関連事業であることも鑑み、当財団法人大阪府埋蔵文化財協会に第1次調査を委託されることとなった。

第1次調査は、大阪府教育委員会の指導のもとに実施され、設定された14ヶ所のトレンチのうち海岸に近い2ヶ所のトレンチから古墳時代の遺構、遺物および遺物包含層を確認した。

その結果、大阪府教育委員会は遺物遺構を確認した地域については本格的な発掘調査が必要と判断を下し、昭和63年4月1日に2次調査における委託契約を締結した。

今回の発掘調査は、海岸に隣接した部分から国道26号線方向へ33mの道路予定地部分全域979㎡実施した。

調査は二度に分けて実施し、第1回は昭和63年5月8日に着手し、同年9月30日（7・8月は海水浴場のため中断）まで、第2回は平成元年1月13日に着手し、平成元年2月28日に終了した。

遺物整理は、平成元年3月31日に山田海岸遺跡発掘調査報告書の刊行をもって終了した。

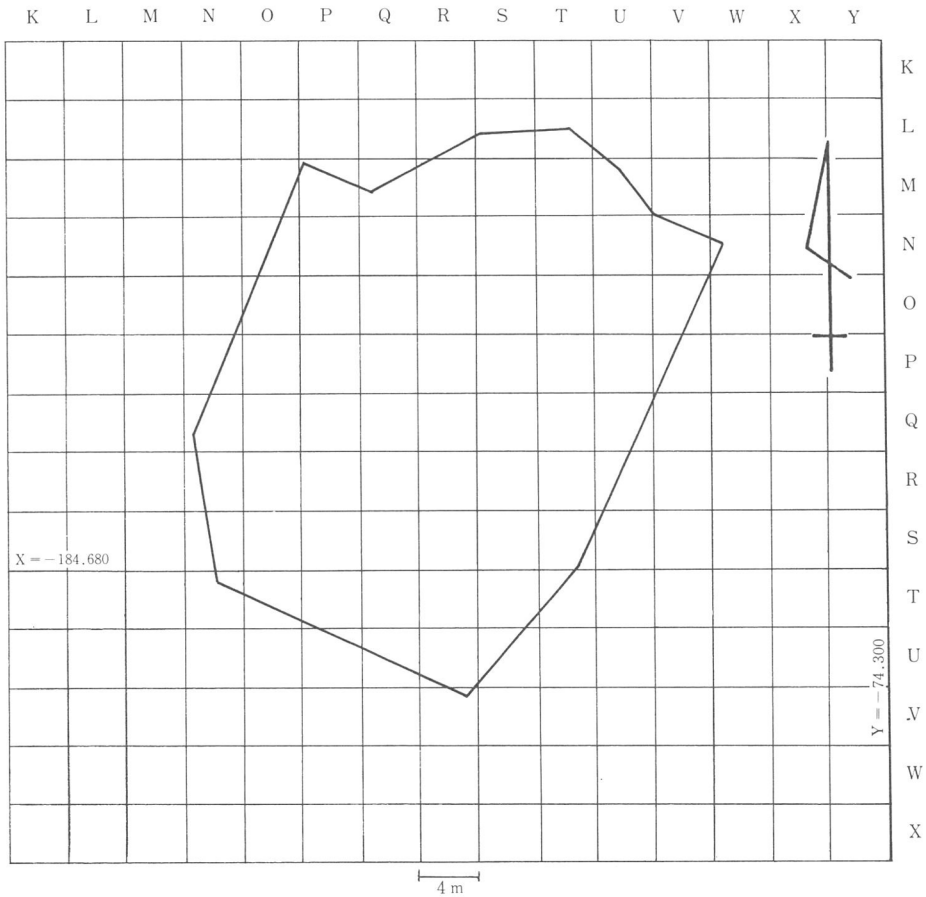
第 2 節 調査の方法

調査地の地区割り、各地区の名称、遺構番号、遺構の略称、遺物登録番号、土層の記録

等々調査の基本にかかわる作業は全て当財団法人大阪府埋蔵文化財協会の定める発掘調査規定によっている。

調査区は、大阪府発行新版（昭和59年度建設省国土地理院承認）の1/2,500の地形図の大B-1-3に位置する⁽¹⁾（第3図）。100×100m、4×4m区画の各地区の位置関係は第1図の示すとおりである。

註1 大阪府文化財分布図



第1図 地区割り模式図

第II章 位置と環境 (第2～4図；図版1～3)

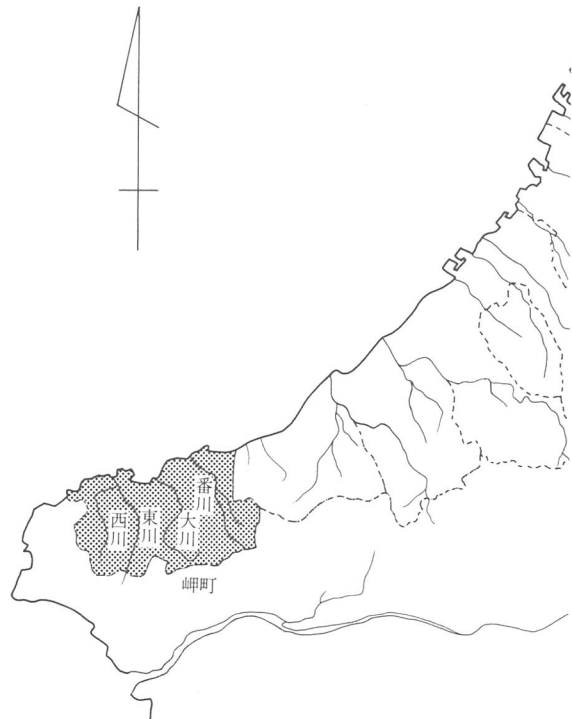
山田海岸遺跡の位置する岬町は、大阪府の最南端にある。町域は、南北約6km、東西約10kmにおよび、北は大阪湾に面し、東は阪南町、南と西は和歌山県と接している。

岬町の地形は、ほとんどの地域は和泉山脈から派生する丘陵部分が占め、平地部分は、海に注ぐ3本の河川の両側に若干形成された河岸段丘面と、河口付近に限られる。それらは、東から番川の淡輪、大川の深日、東川の多奈川であり、各々集落が見られる。

当遺跡の所在する岬町山田の地域は、淡輪の平野の南方に位置し、番川の支流の河口部分にあたる。この付近一帯は以前から山田遺跡として知られており、古墳時代の須恵器の杯が採集されている。しかし本格的な調査は実施されておらず、実態は不明である。

次に岬町付近の歴史的環境を見ると、現在のところ旧石器時代の遺跡は確認されていない。しかし縄文時代後期になると

この時期の遺跡としては大阪府内においても有数の遺跡である淡輪遺跡が番川の上流に出現する。淡輪遺跡は大阪府教育委員会の十数年にわたる調査によって縄文時代後期の竪穴住居等の遺構が多数確認⁽¹⁾されており、集落としての様相が明らかになりつつある。弥生時代になると前期の遺跡は確認されていないが、淡輪遺跡に中期の竪穴住居、方形周溝墓や木棺墓、溝等の遺構が検出⁽²⁾されている。弥生時代後期の遺跡としては岬公園内遺跡、みどりヶ丘遺跡⁽⁷⁾がある。古墳時代に入りこの地域内で前期古墳の存在は認められていない。中期には番川の形成する沖積平野上



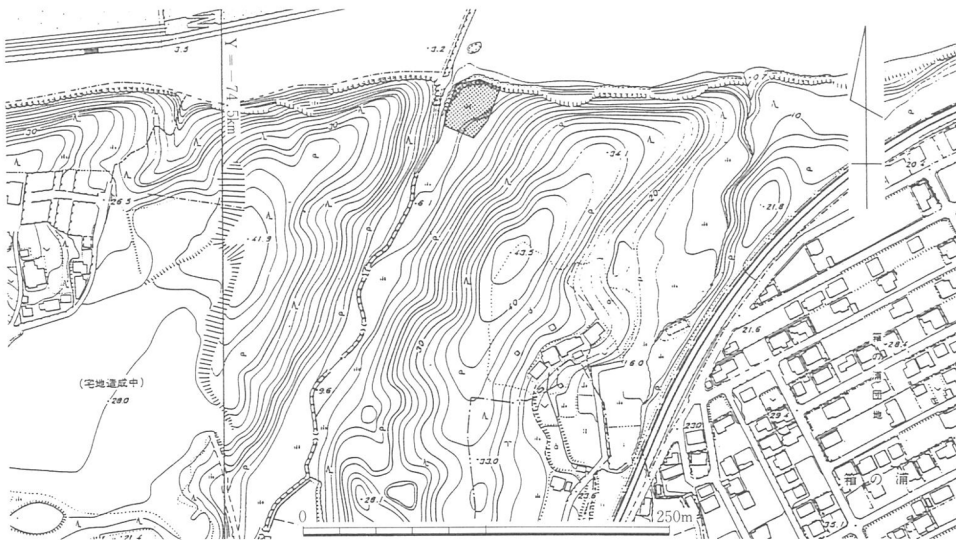
第2図 岬町位置図

に立地する西陵古墳、宇度墓古墳の2大前方後円墳をはじめ西小山古墳を含む淡輪古墳群が出現し、後期には和泉山脈から海に向かって形成される段丘上に立地する鴻ノ巣山古墳群、久保谷古墳群、寺山古墳群をはじめ白峠山古墳、真鍋山古墳といった横穴式石室を持つ群集墳が出現する。古墳時代中期、後期にわたりこの地域独自の文化を展開していくが、古墳時代の集落においては、近年までその存在は明らかにされていなかったが昨年度番川下流遺跡における調査において、古墳時代後期の竪穴式住居、溝などが確認されており、須恵器、土師器などの他に製塩土器、蛸壺などが出土している。

岬町から阪南町の海岸付近の遺跡では製塩土器が出土しており、阪南町では田山遺跡において奈良時代の製塩土器が、また岬町内では時期は不明であるが、淡輪遺跡・番川下流遺跡において製塩土器が出土している。また岬町西端西川から分流する小河川河口付近に立地する小島東遺跡は、弥生時代終末から奈良時代にかけての製塩土器が出土し、それに伴った石敷炉が確認されている。

奈良時代以降の遺跡として明確なものが少ないなかで、淡輪遺跡付近にある医王寺跡では平安時代の軒平瓦が出土している。このほか中世城館跡として淡輪遺跡内に淡輪邸跡がある。

以上のように縄文時代から中世にかけて各時代ごとに岬町内遺跡を概説してきたが、本格的な調査が行われていない遺跡が多く、今後の調査が注目される。



第3図 調査区位置図 (1/5,000)



- 33. 山田海岸遺跡
- 1. 山田遺跡
- 2. 鴻ノ巣山古墳群
- 3. 淡輪遺跡
- 4. 宇土墓古墳
- 5. 西小山古墳
- 6. 医王寺跡
- 7. 西陵古墳
- 8. 久保谷古墳群
- 9. 久保谷中世墓群
- 10. 真鍋山古墳
- 12. 寺山古墳
- 13. 寺山南古墳
- 22. 岬公園内遺跡
- 23. 船守神社
- 28. 祇園橋遺跡
- 38. 土浦藩陣屋跡
- 39. 鴻ノ巣山1号墳
- 40. 淡輪成跡
- 22. (阪南町)田山遺跡

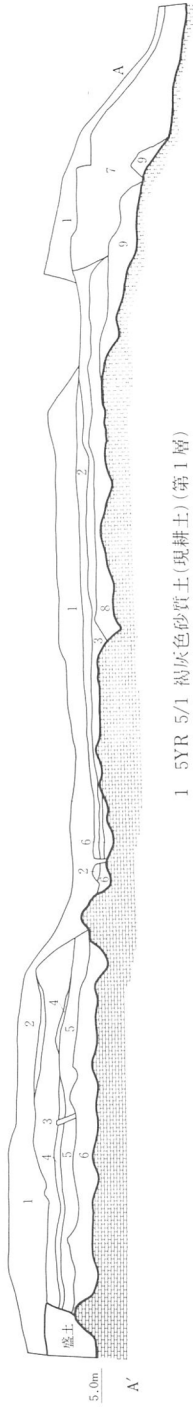
第4図 周辺遺跡分布図 (1/20,000)

第Ⅲ章 調査成果

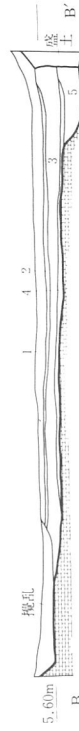
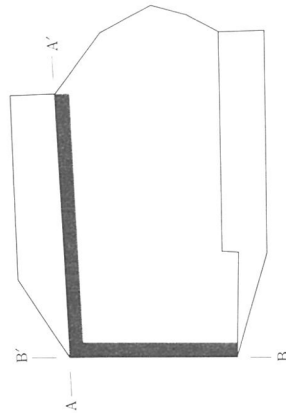
第1節 基本層序と微地形（第5・6図；図版4～6）

山田海岸遺跡の現在の地形は、基本的には海に向かって緩やかな傾斜をもちながらも平坦地が続き海岸線に面する崖に至るが、地山面では崖の手前約3mのところ約1mの段差が付き崖との間に約100mの「テラス」状の平坦地が認められる。今回の調査で検出した製塩炉の大半はこの「テラス」の上面に位置する。地山の上部はにぶい黄褐色を呈した粘土層あるいは粘質土層でその下層は礫層である。海岸に面した崖面では浸食作用によって礫層が露出している。したがって、地山上面の堆積層は段差から崖までの「テラス」の上部にのみ見られるもの（製塩土器、焼土、炭を多量に含む）とその上部あるいは山側の平坦地を中心に広がりを見せるものと大別できる。以下、基本的な層序について上層から説明する。

- 第1層 現在の耕作土及び床土である。調査地全面に約30cmの厚みをもって広がる。
- 第2層 明黄褐色砂質シルト層、厚さ10～30cm程度ではほぼ水平に堆積する。
- 第3層 褐色あるいは明黄褐色のシルト層、厚さ20～40cmで調査区南西部から中央部にかけて地山直上に堆積する。
- 第4層 黄褐色あるいは褐灰色の土層、厚さ10～20cmで調査区北部中央付近から北方に広がり20-O O、26-O Sの上部に堆積する。
- 第5層 調査区北部の段差から崖にかけてのテラス部分の上部に0.2～1.0mの厚みをもつ堆積層である。製塩土器、焼土及び炭等を多量に含んでおり4層（上層から上層、礫上層、礫層、下層）に分層できる。
- 上層 黒褐色土層、厚さ4～20cmで39・40-O Hの構築面の上部に堆積する。
- 礫上層 黒色土層、厚さ5～20cmで上層直下から43-O Hの上端部までに堆積しているものである。
- 礫層 黒色土層、厚さ10～20cmで礫上層下から43-O Hの構築面までに堆積する。礫上層と同一の堆積層である可能性は充分に考えられるが、遺物の取り上げ作業上、一応分層を試みた。
- 下層 黒褐色砂質土層、厚さ10～40cmで地山直上に堆積する。

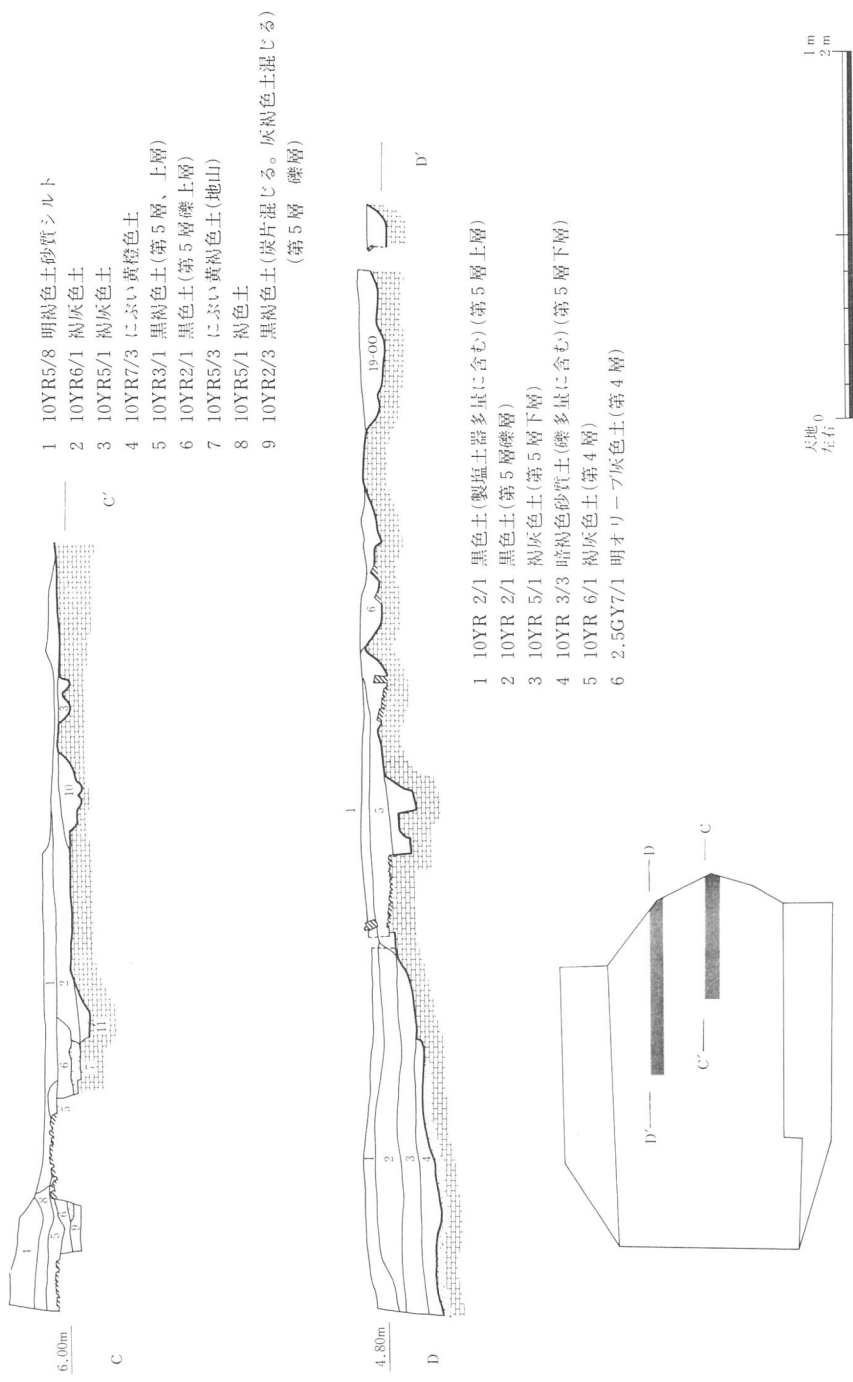


- 1 5YR 5/1 褐灰色砂質土(現耕土)(第1層)
- 2 10YR6/6 明黄褐色土
- 3 10YR5/4 にぶい黄褐色砂質シルト
- 4 10YR6/6 明黄褐色砂質シルト(第2層)
- 5 10YR4/4 褐色砂質シルト
- 6 10YR5/3 にぶい黄褐色砂質シルト(φ 6 cm~15cmの礫混じる)(第3層)
- 7 10YR4/4 褐色土
- 8 10YR5/3 にぶい黄褐色土
- 9 10YR4/2 灰黄褐色土(炭混じる)



- 1 5YR 5/1 褐灰色砂質土(現耕土)(第1層)
- 2 7.5YR5/8 明褐色砂質土
- 3 10YR 5/4 にぶい黄褐色砂質シルト(第2層)
- 4 10YR 6/6 明黄褐色砂質シルト
- 5 10YR 4/4 褐色砂質シルト(第3層)

第5図 基本層序1 (上下1/80 ; 左右1/160)



第6図 基本層序2 (上下1/60; 左右1/120)

第2節 製塩関連遺構と遺物

海に面した狭い谷筋に立地する当遺跡は、その先端部で波浪による浸食がみられる。製塩に関連する遺構は、そこで集中して検出された。また、製塩炉は大別して3面に重なっていることを層位的に確認した。特に最も海よりでは、地山面の落ち込みとそれに伴う焼土面を確認したことより、古くから連続と製塩を営んでいたことが判明した。加えて、最上層の製塩炉に主軸を一致させた建物跡、溝や製塩土器の投棄坑等がある。

1. 製塩炉（OH）

39-OH（第7図；図版7）調査区の海よりD07MT・NTに位置する石敷炉である。3×2mの規模で、平面プランは不整形に近い楕円形をしている。後述するように補修・拡大の結果であろう。主軸は、N-112°-Wである。炉に使用されている石材は、近辺の丘陵に露出している角礫がほとんどであると思われるが、一部拳大の円礫を敷く部分もある。一方、敷石の中央部には石のない部分がある。石の抜き取りを想定するよりは、元來石が敷かれていなかったのだろう。個々の敷石を見ると、火熱を受けて変色が認められるもの、亀裂が入っているもの、3～4片に割れているものがある。しかし、量的にはそれほど多くない。それらの周辺には全く変色も破損も受けていない石が多く見られて、使用するうちに何度も差し替えられたことが窺える。また、石の表面には灰白色・黒色ないし暗褐色の薄い付着物がまばらに認められた。煮沸煎熬の際、生成されたものと思われる。



第7図 39-OH平面図 (1/30)

40-OH (第8図; 図版7)

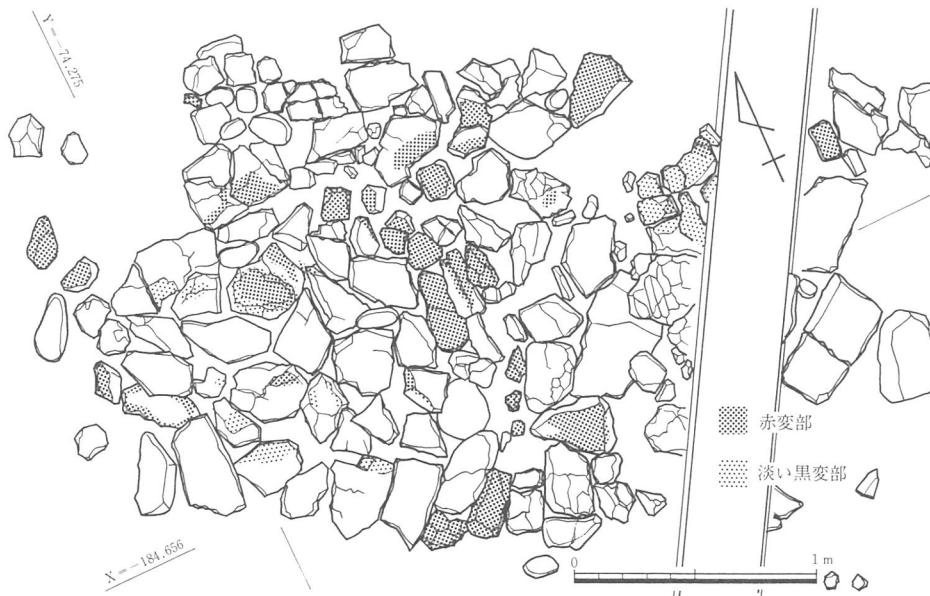
D07MS・NSに位置し、東端では一部が39-OHの下に重なっていて、先行して築かれた可能性を示唆している。長辺2.0m・短辺1.9mのほぼ方形を呈し、みかけの主軸はN-112°-Wである。また、炉周辺では製塩土器、灰、焼土を含んだ堆積層が広がる。今回の調査で検出された石敷炉のうち最も遺存状況の良いものである。使用された石材は39-OHと同様で、長径50cmを最大とするが30cm前後のものが多い。

炉全体の配石状況は、他のものに比べてより整然かつ密である。炉の西側は比較的大型の石のみが配される一方、それらを逆L字状にとりかこんで北側と東側には小礫を混ぜえた5~10cmほどの低い高まりをもつ敷石面を造り出す。その結果、炉面はおおむね平坦であるものの、中央より西側で若干くぼんだ様になっている。

個々の石を見ると、赤変・黒変化したものが39-OHよりも多く、分布状況は東側に集中する。さらに表面がぼろぼろになったり、3~4片に割れた石が東半部に見られることも加えて、この部分により強い加熱のあったことを示している。

また、石の表面には黒色斑状の付着物が観察された。他の炉でも散発的に存在するが、特に本炉においては北側の一群に顕著に見ることができる。

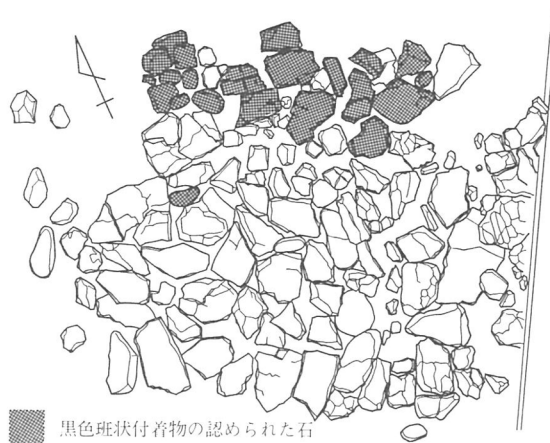
しかし、このような煮沸・煎熬作業にともなって劣化・変色した石がある一方で、そのすぐとなりには全く変化の見られない石もある。これは、炉を使用する間に繰り返し石の



第8図 40-OH平面図1 (1/30)

差替え等の補修作業が行なわれたためと思われる。

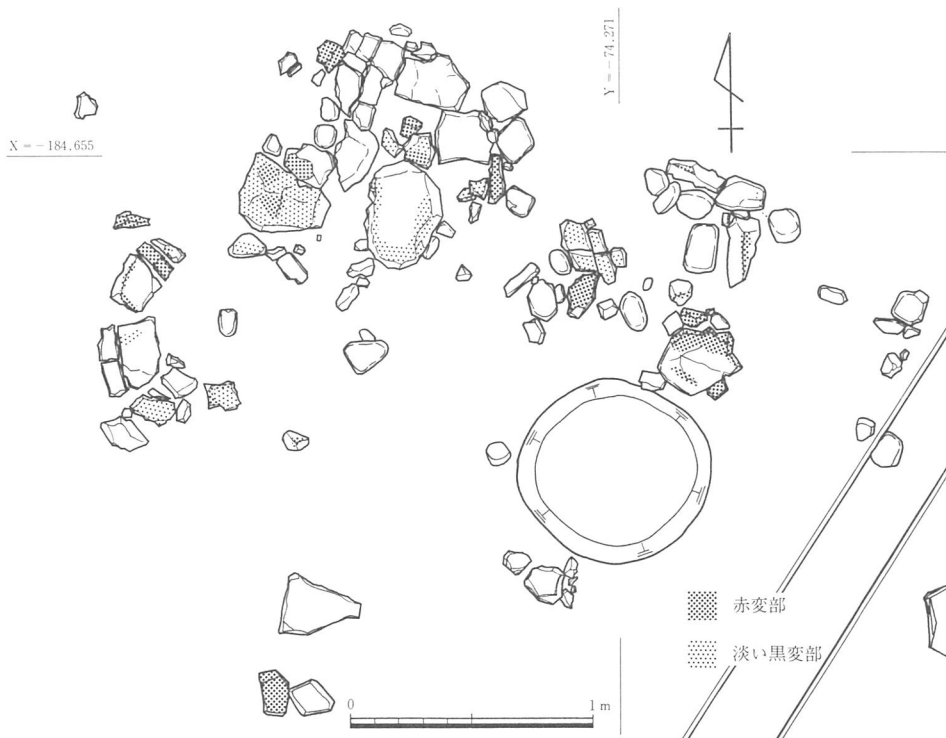
また先述したように、配石状況が炉の西側と北・東側において異なることと、全体的には必ずしも整った方形のプランを呈していないこと等から、繰り返し行なわれた補修作業と共に増築もなされた結果を経て今回検出された形となったのであろう。



第9図 40-OH平面図2 (1/40)

41-OH (第10図; 図版8)

D07N S・NT付近くに位置する。この製塩炉は浸食の影響を受けたため40-OHに比べて敷石の数が少なく正確な平面形は不明であった。しかし構造的には同じ、1辺2.2mの正方形を呈するものとする。敷石には30×40cm程度の扁平な角礫を使用しており、敷

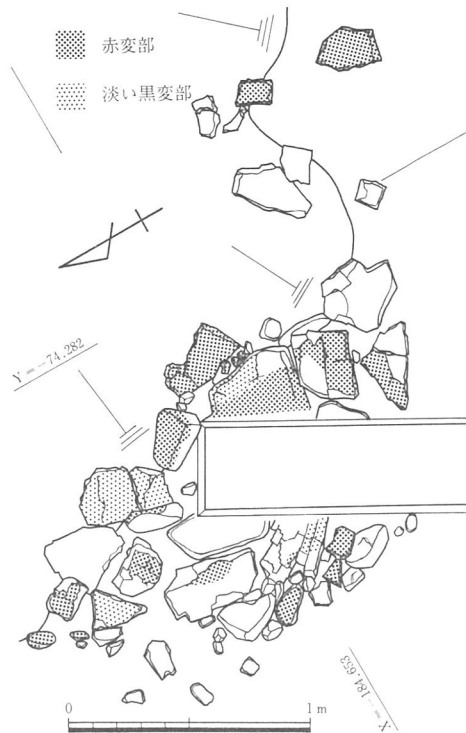


第10図 41-OH平面図 (1/30)

石の表面には火を受けて赤色・黒色に変色したり、また石が割れているもの、亀裂が生じているものが部分的に認められた。

42-OH（第11図；図版8）

D07NUに位置する。調査区中央畔の北端から崖面にかけて確認された石敷製塩炉である。この炉は、浸食の影響を受けて敷石が崖下に崩れている状態であり正確なプランは不明であった。検出した平面形は長辺1.6m・短辺1.2mの不定形を呈するが、構造的には40-OHと同じものと考えられる。敷石は40-OHで使用しているものと同様な30×40cmの角礫を使用しており、敷石の表面は、火を受けて赤色・黒色に変色したり亀裂が生じているものが認められた。



第11図 42-OH平面図（1/30）

その他の炉（第12図；図版10）

今回の調査では、39～42-OHの下層から2基の製塩炉（43・44-OH）を確認している。これらの製塩炉は、上面の製塩炉を現状のまま保存したために十分な調査ができず、製塩炉の正確なプランは、把握できなかった。

以下各製塩炉について説明する。

43-OH

D07NUから南西方向に向け広範囲に広がりをもつ石敷製塩炉である。40-OHの直下から西方に向けて広がり呈する焼土層および包含層内で確認した。この炉に使用されている敷石には、上面で使用されている角礫は無く直径10～20cm程度の「玉」状の石を使用している。

44-OH

D07KUに位置する。調査区北端に設定したトレンチ内で、地山面が火を受けて褐灰色から赤褐色に変色しているのを確認した。またこの炉は、上面で検出した石敷製塩炉と異なり石を伴わない製塩炉であることが認められた。最上面で確認した石敷製塩炉から深さ約1mを測り、長さ3.6m・深さ約5cmを測る。



第12図 製塩関連遺構全体図

2. 炉周辺の出土遺物（第13～15図；図版11～20）

先にも述べたように今回の調査では、表土直下から地山面までの間約1mにおいて、少なくとも3層の重なりをもつ製塩炉が確認されている。したがって地山面から上方に向けて、炉の上には製塩土器等の遺物、焼土、炭を多量に含んだ包含層が堆積し、その上面に新たな炉が構築されといった状況が繰り返されている。

しかし、最上層の製塩炉を「保存」したために、下層の炉および包含層については部分的なトレンチ調査にとどまらざるを得ず、出土遺物についても層位的に取り上げることは困難であった。

そのため今回の報告では、出土した製塩土器全てにおいて形態分類を行なうこととどめ、編年作業については今後の調査に委ねることとした。

最上層の炉から最下層の炉の間で出土した遺物は、ほとんどが製塩土器で全体の約80%を占め、総数1373点であった。しかし製塩土器のほとんどが細片で、このうち丸底の底部片はわずかに2点に過ぎなかった。また製塩土器を層位別に取り上げた結果、上層757点、礫上層106点、礫層254点、下層17点である。今回の分類方法は、脚台の付くものをⅠ類、付かないものをⅡ類とし、Ⅱ類において器壁の薄いものをA、厚いものをB、さらに口縁部の形態でa、b、c、とした。また製塩土器の他に須恵器片、土師器小皿（第13図、1～4）、土錘、弥生式土器、サヌカイト片等総数386点出土している。

以下製塩土器の分類基準について説明する。

Ⅰ類（第14図 5～7、第15図 102～107）

いわゆる脚台の付くもので、上層では3点（5～7）、礫上層では5点（102～107）出土している。底径2～5cm、残存高1.6～4cmを測り器壁は薄く、剥離が著しいものがある。内面はナデ、外面は指オサエが認められる。

Ⅱ-A類（第14図 9～27・54～58・第15図 77～94・112～118・124・125）

丸底の製塩土器の中で器壁の薄いもの（0.3～0.5cm）で上層では484点、礫上層では53点、礫層では131点、下層で2点出土している。

Ⅱ-A-a類（9～18・54・55・77～84・100）

口径5.5～10.2cmを測り口縁部はやや内傾する。端部は指オサエが認められ、端部内面に若干の平坦面が見られる。

Ⅱ-A-b類（19～26・56・57・85～94・112～119・124・136・137）

口径5.2～7.2cmを測り、口縁部はほぼ直立する。端部は指オサエが認められ、a類に比

べて薄い。

炉周辺の出土遺物ではないが、他の包含層から出土した製塩土器の中に形態的にはII-A-b類に属すが、胎土が須恵質に近く、灰色を呈したものがある。

II-A-c類 (27・58・125)

口径9.4~10.8cmを測り体部から端部にかけて内湾する。胎土はa、bに比べて緻密である。口縁端部にナデの痕が認められる。また口縁部内面下方に「貝殻」状の痕跡が認められるもの(27)がある。

II-B類 (第14図 28~52・59~76・第15図 95・96・119~123・127~133・338~341)

丸底の製塩土器の中で器壁の厚いもの(0.5~0.9cm)で上層から370点、礫上層から52点、礫層で131点出土している。

II-B-a類 (28~30・59~61・95・96・112)

口径9.0~9.8cm測る。口縁部は上方にかけて外傾し、器壁は厚くなる。口縁端部は丸くおさめている。口縁部内外面には指オサエの痕が認められる。

II-B-b類 (31~52・62~66・68~70・72~76・120・121・123・126~133)

口径8.2~12.9cmを測る。口縁部は「ラッパ」状に大きく開く。口縁部内外面には、ナデ、指オサエの痕が認められる。

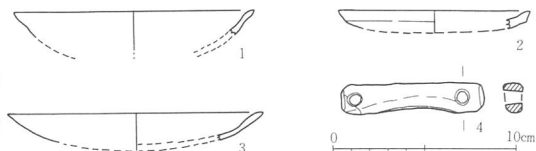
II-B-c類 (67・71)

口径9.8~12.4cmを測る。口縁部が外傾した後さらに外上方に大きく開く。口縁部内外面には、ナデ、指オサエの痕がある。口縁部内面上方に若干の平坦面がある。

甕形製塩土器 (第14図 53・第15図 97~99・134・135)

今回の調査では石敷炉周辺の焼土層内から製塩土器と共に多量の土師器の甕が出土している。この甕は製塩作業のどのような工程の中で使用されたものかは不明であるが、形態、出土状況等小島東遺跡(泉南郡岬町小島所在)において出土し、甕形製塩土器と報告されているものに近似していると思われる。口径15.1~21.4cmを測る。頸部から外反して口縁部に至り、口縁端部はややとがり気味である。頸部から口縁部にかけての内外面にはナデ、指オサエの痕が認められる。体部より下方の調整については二次焼成を受けているために摩滅が著しく不明である。

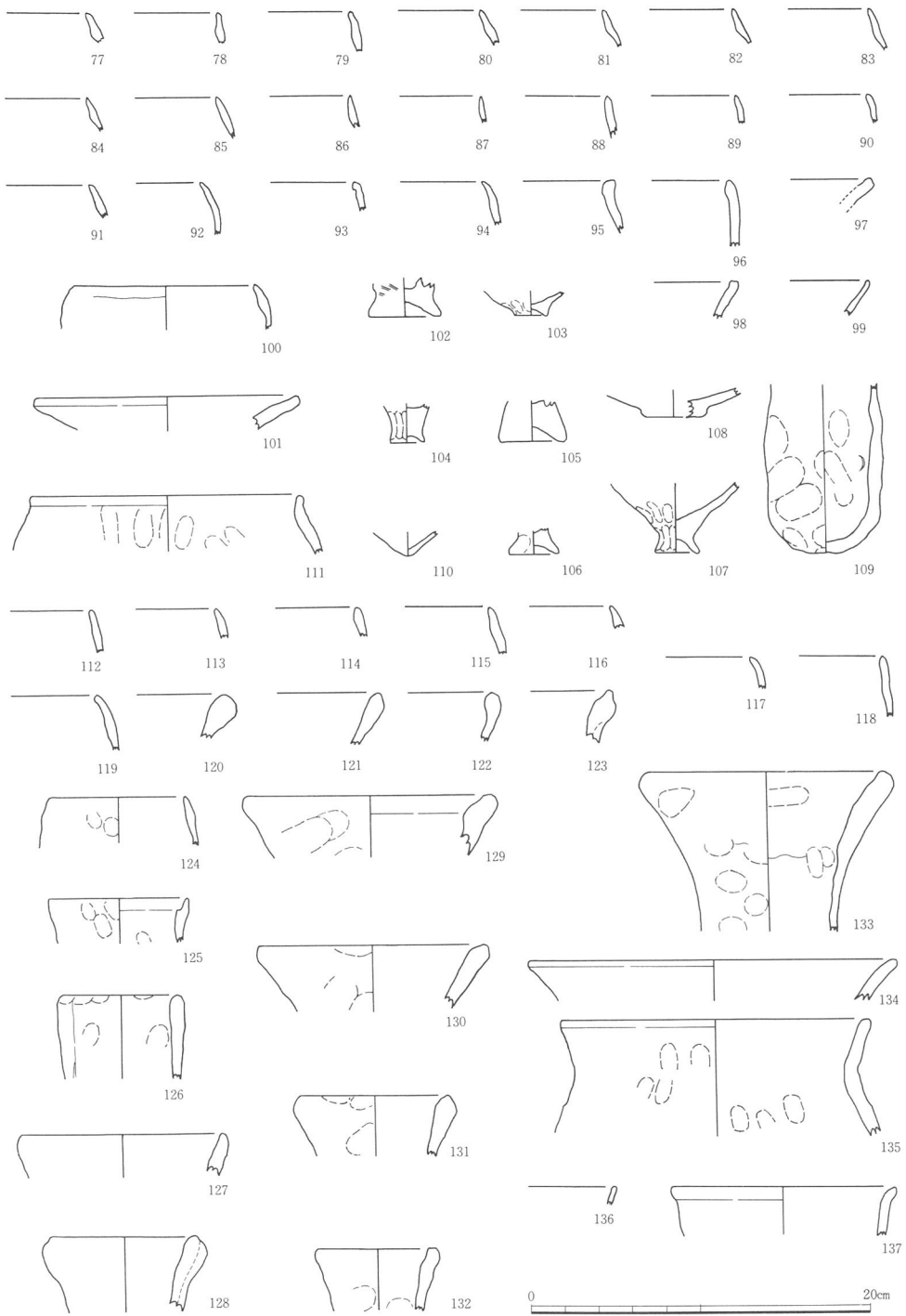
なお、19-00内から甕形製塩土器の完形品が出土しており体部外面には縦方向のハケ目が確認できる。



第13図 炉周辺出土遺物図1 (1/4)



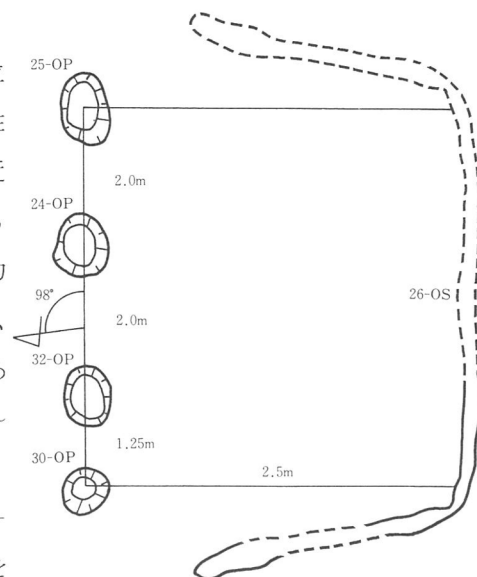
第14图 炉周边出土遗物图2 (1/4)



第15图 炉周边出土遺物图3 (1/4)

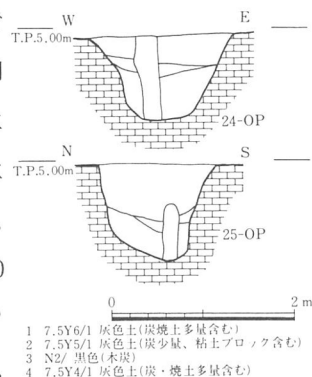
3. 建物（OB）（第16・17図；図版10）

33-OB D07-N T・P U・P T付近に位置する。主軸N-98-W方向に並ぶ4基の柱穴（24・25・30・32-OP）とD07P U付近で確認した「L」字状の溝（26-OS）によって構成されている。4本の柱列の全長は、約5.3mで柱穴の間隔は西からそれぞれ約2m、2m、1.25mを測る。柱穴の平面形は円形あるいは楕円形を呈し、円形のもの直径60～80cm、楕円形のもの長径1m・短径60cm・深さはそれぞれ約40～50cmを測る。また32-OPを除く他の3基の柱穴には直径約15cmを測る柱根があり、いずれも炭化した状態で検



第16図 建物模式図

出されている。埋土は灰色ないし褐灰色で、焼土、炭を含んでいる。柱穴の南側に位置する溝は幅20～40cm・深さ約10cmを測り、埋土は褐灰色土である。以上のことからこの建物の構造は「片屋根」に「雨落ち溝」を伴ったものと考えられる。遺物は24-OPから製塩土器II-A類8点、須恵器杯身片1点（284）、25-OPから製塩土器II-A類3点、土師器片、須恵器片、30-OPから製塩土器II-A類3点、土師器碗（285）32-OP製塩土器II-A類8点、土師器片、26-OSからサヌカイト片、須恵器甕1点（291）が出土している。



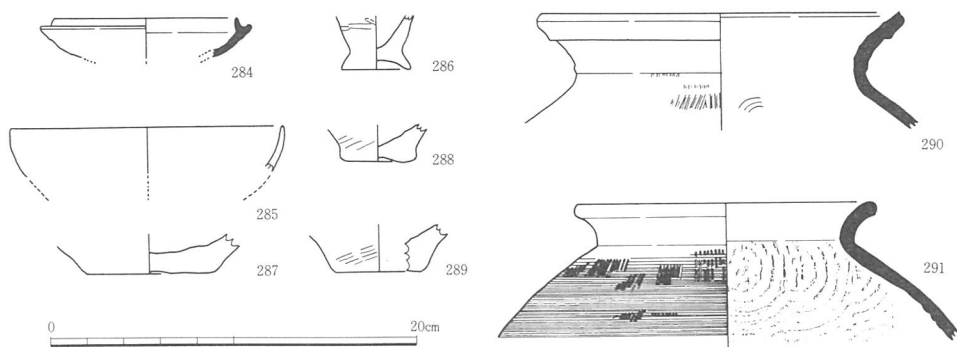
第17図 24・25-OP断面図 (1/40)

また、25-OPの南方5mの位置（D07P T）に8-OPを検出したが、規模（一辺40cm）、埋土（褐灰色土）等から33-OBとは関連しないものと思われる。

29-OX D07OU・OVに位置する。建物の約1m海側から崖にかけて広がりを呈し、最大比高差約1mを測る。埋土は3層からなり上層から黒褐色土層、褐灰色土層、暗褐色土層である。遺物は製塩土器I類（286）、II-A類29点、須恵器甕1点（290）、弥生式土器底部3点（287～289）が出土している。

4. 土坑（OO）（第12図；図版10）

6-OO D07OTに位置する。直径30cmのほぼ楕円形を呈して深さ8cmを測る。埋土は



第18図 24・30-O P・26-O S・29-O X出土遺物 (1/4)

褐灰色土層である。遺物は出土しなかった。

7-O O D07 O Tに位置する。試掘坑により、大部分が削られているために規模等は不明な部分が多いが、残存部で30×50cm、深さ10cmを測る。埋土は褐灰色土層である。遺物は出土しなかった。

9-O O D07 P Tに位置する。直径30cmの円形を呈している。深さは10cmを測り、埋土は褐灰色土層である。遺物は出土しなかった。

20-O O D07 O Rに位置する。平面形は直径20cmの円形を呈し、深さ6cmを測る。埋土は褐灰色土層である。遺物は製塩土器II-A類1点、土師器細片が出土している。

21-O O D07 O Rに位置する。直径30cm・深さ10cmを測り、埋土は褐灰色土層である。遺物は土師器高杯の小片を出土したが、脚接合部は挿入法によるもので古墳時代のものと思われ、混入品と考えられる。

23-O O D07 O Tに位置する。一部が32-O Oと重なっているが、長径80cm、短径50cmの楕円形を呈する。深さ8cmを測る。遺物は出土しなかった。

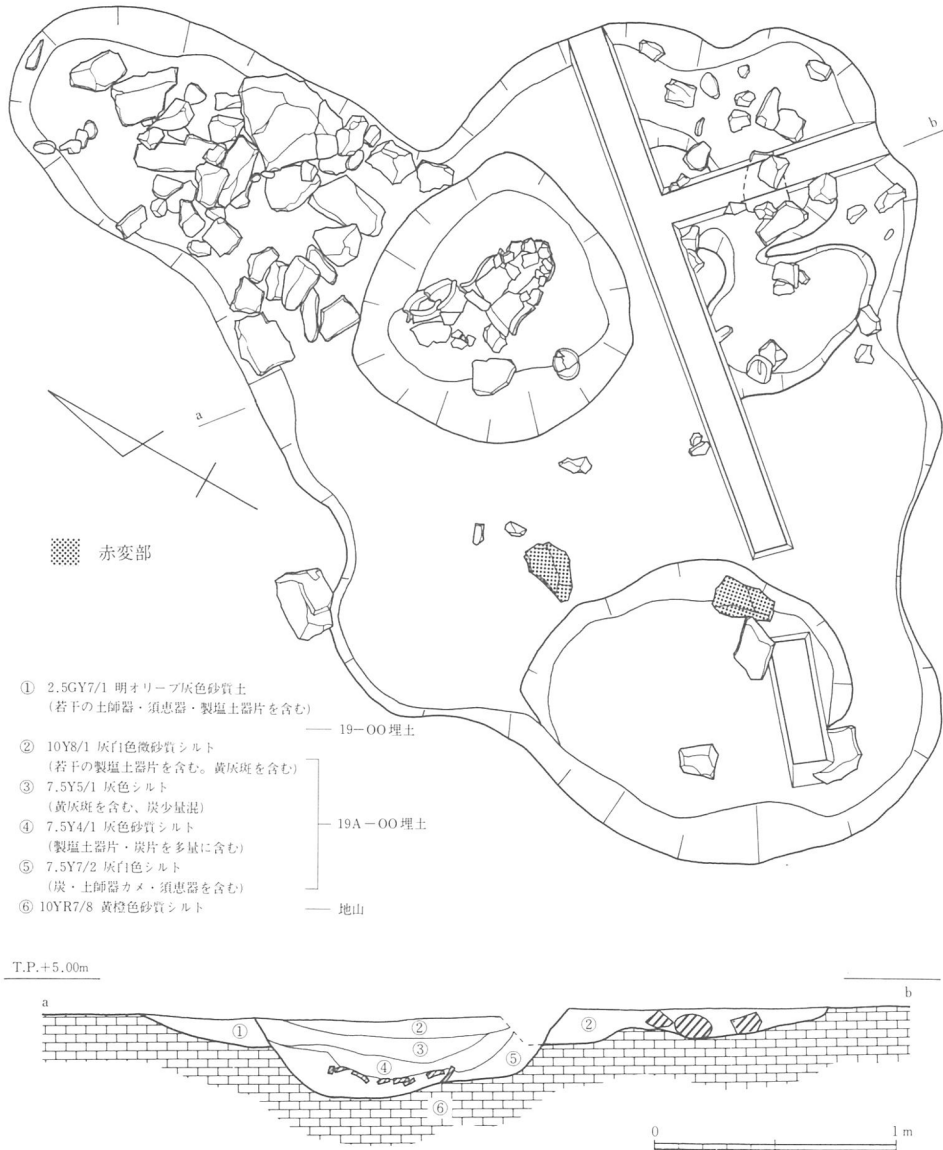
27-O O D07 O Sに位置する。26-O Sが途切れたすぐ東側にあり、直径20cm、深さ6cmを測る。埋土は灰褐色土層である。遺物は出土しなかった。

37-O O D07 O Sに位置する。中央畔に切られており全体のプランは不明である。残存部は、長径1m、短径50cmのほぼ楕円形を呈するものと思われる。深さは17cmを測り、埋土は褐灰色土層である。遺物は出土しなかった。

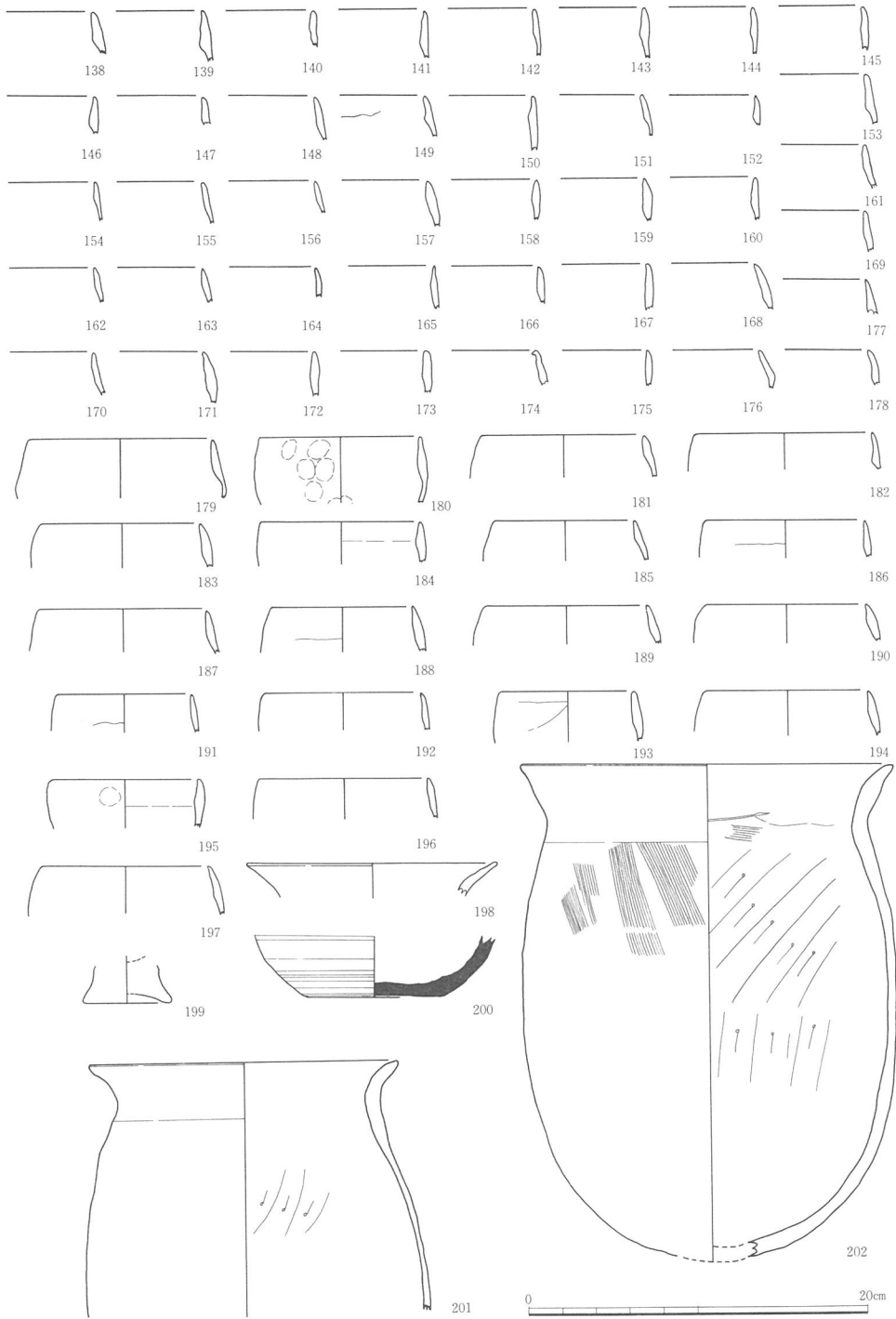
19-O O (第19~21図; 図版9・21~28) 調査区の中央、D07 P Q付近に位置する。当初は一つの遺構として捉えていたが、中央部で直径1.1mの土坑を後に掘削していることがわかった。以下、先をB、後をAとして記述する。Bの平面プランは不定形を呈し、落ち込み」状遺構と呼ぶべきかもしれない。規模は長軸で4.9mを測る。拳大~50cm程度の

自然石が、特に土坑の北部を中心に集中して見られる。また、これらの石の中には加熱を受けた痕跡を残すものもあるが、土坑周辺や埋土内に顕著な炭、灰の混入も見られず焼土面も無いことから、製塩炉の可能性は考えにくい。埋土は砂質土層である。遺物は、製塩土器II-A-a類(203~283)のほか、時期不明の土師器や須恵器の小片が出土した。

Aは、直径1.1mのほぼ円形を呈し、深さは0.3mである。Bが埋まった後に、そのほぼ



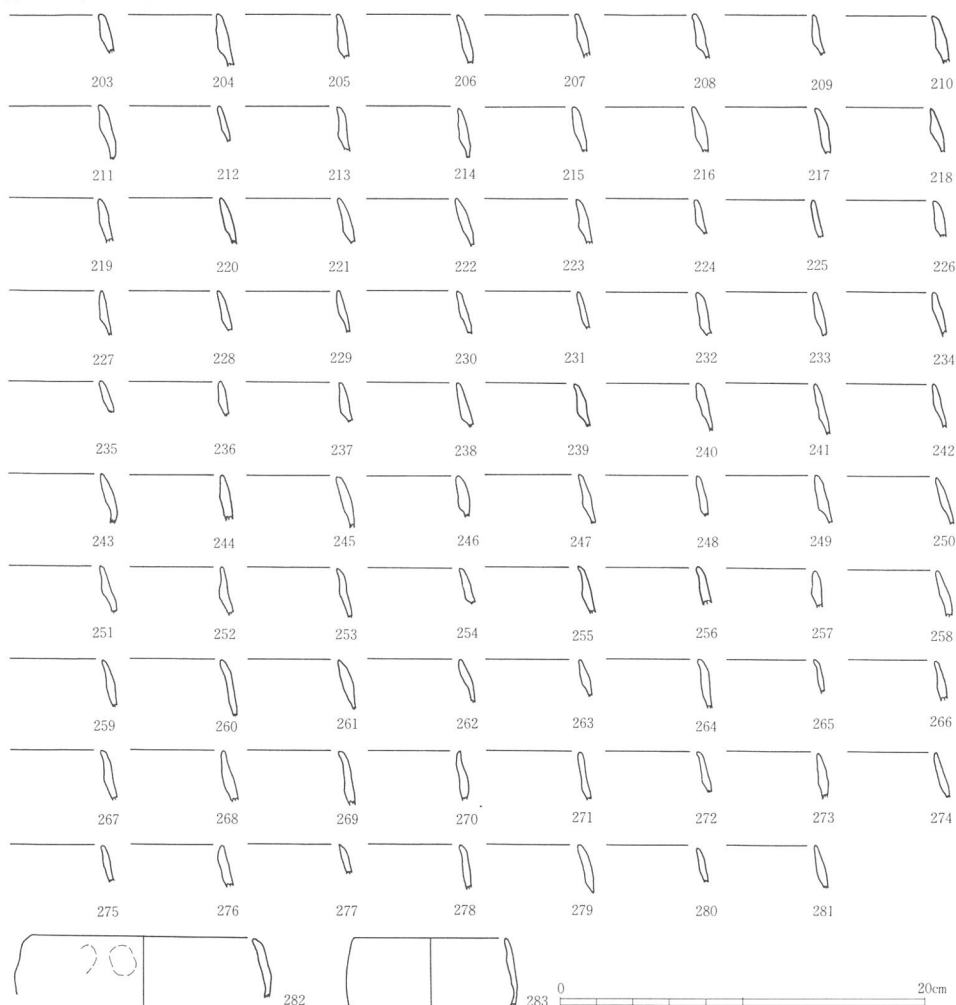
第19図 19-00平・断面図 (1/30)



第20図 19A-OO出土遺物図(1/4)

中央に掘り込んだものである。埋土には多量の製塩土器等の遺物の他に焼土、炭も多く含まれていた。

遺物は製塩土器Ⅰ類（199）、Ⅱ-A-a類（138～197）、須恵器の壺の底部（200）、甕形製塩土器2個体（201・202）が出土した。202は完形品である。甕形製塩土器は、いずれも内・外の器壁に細かなひび割れと剥離が生じており製塩土器に見られる典型的な状態を見せている。また、火熱による色調の変化も見られた。そのうち201は長胴の甕形を呈する。口縁部をヨコナデ、肩部に縦位のハケ目を施して体部以下は器壁を丁寧に平滑化する。内面は頸部に粘土接合痕が見られ、一部横位のハケ目が観察される。また体部内面は斜めにけずる。



第21図 19B-〇〇出土遺物図（1/4）

5. 溝（OS）（第12図；図版10）

22-OS D07OS区に位置する。中央畔に切られており全長は不明である。残存部は長さ1.5m、幅50cm、深さ14cmを測る。埋土は褐灰色土である。遺物は出土しなかった。

第3節 その他の遺構と遺物（第28図；図版10）

製塩に関連するもの以外に、本調査区では多くの遺構がある。一部を除き地山面で検出した。出土遺物が皆無もしくはごく少量のため、具体的な形成時期は不明であるが層序・土質などより、その多くは中・近世以後本調査区付近の耕地化に伴うものと考えられる。

以下、順を追って述べることとする。

1. 土坑（OO）

1-OO D07QQに位置する。長径80cm、短径50cmの楕円形を呈し、現床土を除去した際に灰色包含層上面で検出した。深さ12cmを測り、埋土は黄褐色砂質土層である。

遺物は出土しなかった。

2-OO 1-OOに重なるようにして検出したもので、その規模は不明。埋土は1-OOよりやや暗い褐灰色砂質シルト層である。遺物は出土しなかった。

3-OO D07RRに位置し、長径50cm・深さ7cmを測る。埋土は灰黄色砂質土層である。

遺物は瓦器の細片が出土したが、図化し得るものはなかった。

4-OO D07QUに位置する。直径30cm・深さ10cmを測る。埋土は灰色シルト層である。

遺物は出土しなかった。

5-OO D07NTに位置する。灰色包含層を除去した黒色土上面で検出したが、包含層上面から掘り込まれた可能性が高い。長径60cm・短径40cmの楕円形を呈し、31-OSを切り込む。遺物は出土しなかった。

10-OO D07PSに位置する。長径1.2m・短径90cmの楕円形を呈し、深さ20cmを測る。埋土は黄灰色砂質土層である。遺物は出土しなかった。

11-OO D07RR・SRに位置する。長径1.2m・短径80cmの楕円形を呈し、12-OSを切る。深さ20cmを測り、埋土は灰色砂質土層で礫石の投棄がなされている。

遺物は出土しなかった。

13-OO D07QQに位置する。直径30cmの円形を呈し、深さは10cmを測る。

遺物は出土しなかった。

17・38-OO D07NQに位置する。現床土層上面より掘り込まれており、近年のもので

ある可能性が高い。直径は、17-〇〇が0.9m、38-〇〇が0.7mを測り、深さはどちらも0.6m前後で底面は地山まで達する。どちらも円形を呈する。それぞれの埋土は小礫混じりの砂質土層である。このような土坑は本調査区ではこれら2基のみであった。

18-〇〇 D07N Q・O Qに位置する。長径80cm・短径50cmの楕円形を呈し、深さ10cmを測る。埋土は黄褐色砂質土層である。

遺物は、摩耗の著しい製塩土器の小片が少量出土したが、混入品である可能性が高い。

28-〇〇 D07V Sに位置する。黄褐色砂質土層上面で検出したもので、直径30cm、深さ5cmを測る。埋土は灰黄褐色シルト層で炭を若干含んでいる。

遺物は瓦器の細片、製塩土器片がごく少量出土した。

45-〇〇 D07T Tに位置する。浅黄色砂質土層上面で検出したもので、平面形は長径70cm・短径40cmの楕円形を呈し、深さ18cmを測る。埋土は灰黄褐色砂質土層である。遺物は出土しなかった。

2. 溝 (OS)

12-OS D07R S・RR・R Q・Q P・Q Oにかけての耕作土面の段落ちに添って検出した。幅40~70cm・深さ10cm前後を測る。埋土は黄褐色砂質シルト層である。遺物は出土しなかった。

16-OS D07V S・T Tで長さ5mにわたって検出した。黄褐色砂質土層上面より切り込まれ、幅0.7m・深さ0.4mを測る。埋土は砂質シルト層である。比較的大きな礫石が投棄されている。

遺物は瓦器碗(295)、土師器皿(293、294)、タコ壺(292)が出土した。

31-OS D07N Tにあり5-〇〇によって切られる。長さ1m、幅30cm、深さ12cmを測る。遺物は製塩土器II-A類が1点出土した。

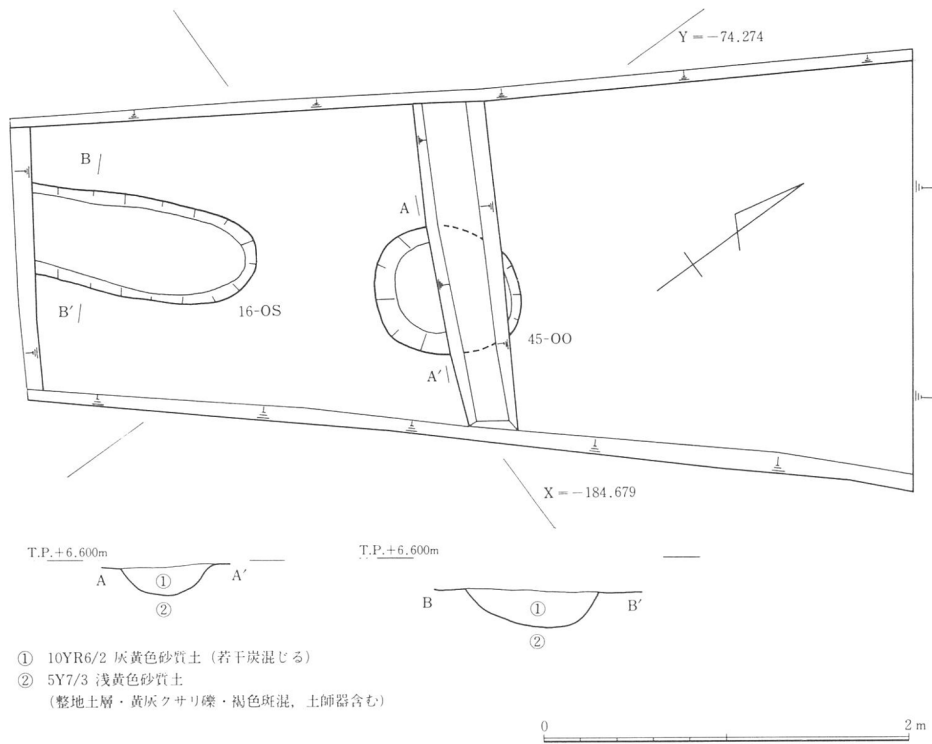
34-OS D07O Tにあり、長さ90cm・幅15cm・深さ5cmを測る。埋土は灰褐色土層である。遺物は出土しなかった。

35-OS D07O Uにあり、全長4.2m・幅20~40cm・深さ10cmを測る。埋土は褐灰色土層である。

遺物は製塩土器II-A類8点出土した。

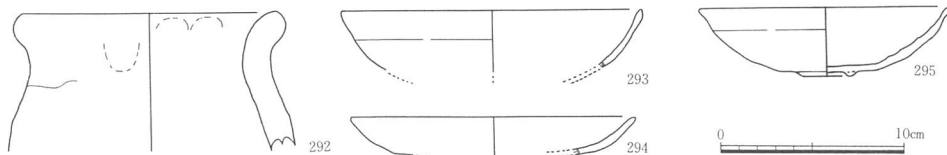
36-OS D07O Uにあり、全長1.2m・幅25cm・深さ10cmを測る。埋土は褐灰色土層である。

遺物は、土師器小片が出土した。



- ① 10YR6/2 灰黄色砂質土 (若干炭混じる)
- ② 5Y7/3 浅黄色砂質土
(整地土層・黄灰クサリ礫・褐色斑混, 土師器含む)

第22図 16-OS・45-OO平・断面図 (1/40)



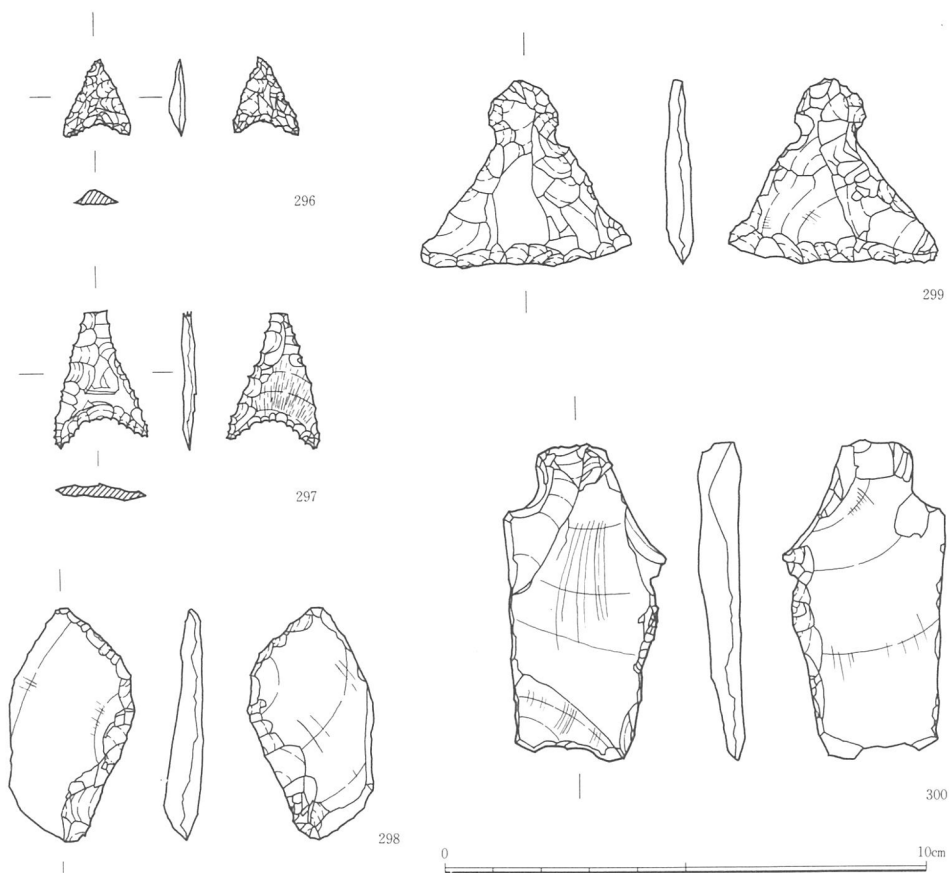
第23図 16-OS 出土遺物 (1/4)

第4節 包含層出土遺物 (第24~27図; 図版28~31)

第1層 (現耕土および床土) は除外する。

第2層出土遺物

製塩土器・土師器・須恵器・陶磁器・瓦器・石器等が出土している。これらの遺物の中で製塩土器が大半を占める。出土した製塩土器のなかには須恵質の製塩土器 (345.346) が含まれている。製塩土器の比率はII-A類が最も多く第2層で出土した製塩土器全体の70%を占め、製塩土器II類16%・II-B類16%・須恵質製塩土器13%であった。その他の遺物の器種は須恵器摺鉢 (335)・須恵器壺 (331.332)・須恵質タコ壺 (330)・土師器甕 (320)・陶器碗 (316~318)・土錘 (301.304.305)・石匙 (300) 等である。



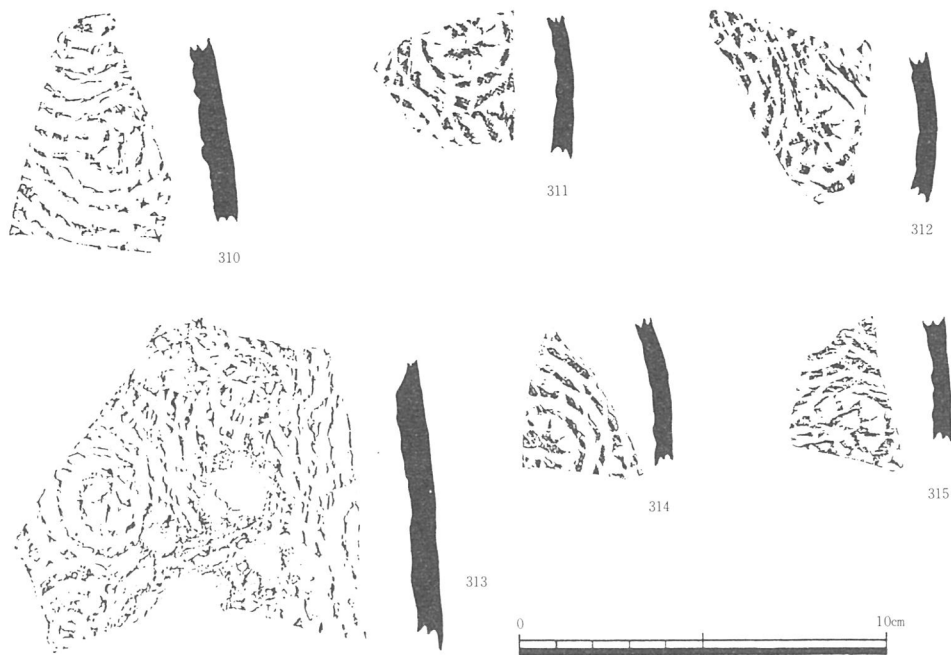
第24図 包含層出土遺物 1 (2/3)

第3層出土遺物

製塩土器・土師器・須恵器・瓦器・石器等が出土している。これらの遺物のなかで土師器が最も多く出土遺物全体の約40%を占める。土師器に続いて製塩土器・須恵器・瓦器・石器の順で出土している。製塩土器はII-A類・II-B類・甕形製塩土器・須恵質の製塩土器(342~344)が出土しており、それぞれの比率は製塩土器全体の10%・40%・10%・40%である。その他の遺物は、土錘(302.303.306.307)、石器の削器(299)等がある。



第25図 包含層出土遺物 2 (1/4)



第26図 包含層出土遺物3 (1/2)

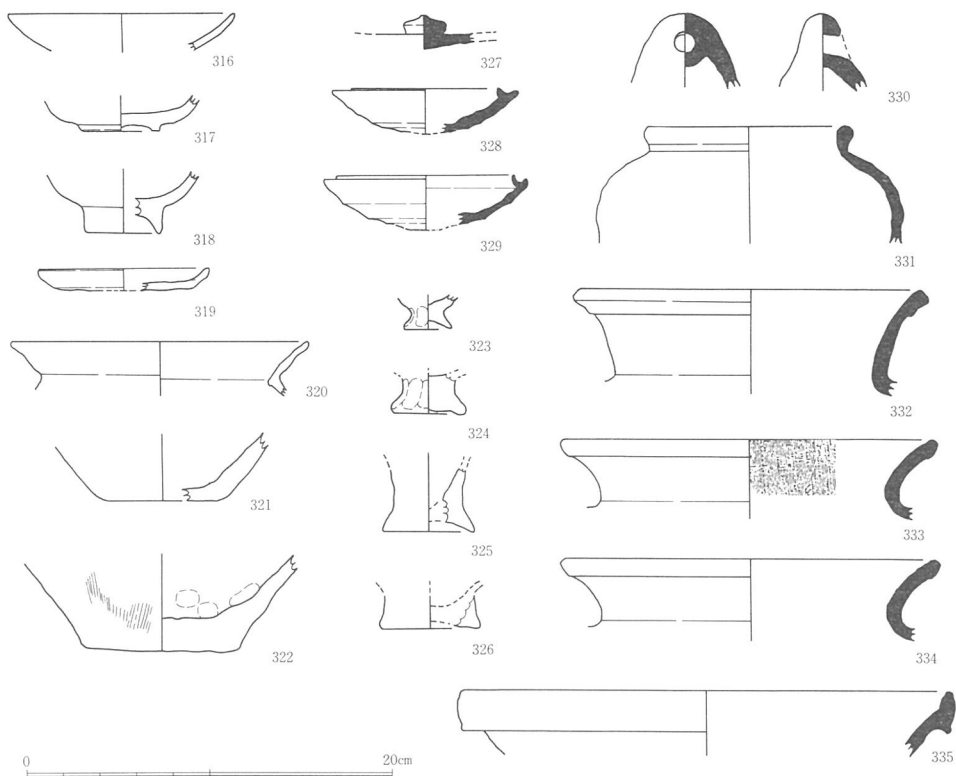
第4層出土遺物

製塩土器・土師器・須恵器・弥生式土器・石器等が出土している。これらの遺物の中で製塩土器が大半を占めており出土遺物全体の約70%に及んでいる。製塩土器は、I類(323~326)・II-A類・II-B類の製塩土器が出土している。II-A類が最も多く、製塩土器全体の約75%を占めている。また胎土が須恵質に近いII-A-b類(5%)も含まれる。II-B類20%・II類5%順である。その他の遺物の器種は、須恵器蓋・杯身(329.327)・土師器皿(319)・弥生式土器甕(321.322)・石鏃(296.297)・石匙(299)等がある。また出土した須恵器甕体部片の内面には車輪文を施したもの(310~315)が認められた。

第5層出土遺物

この層で出土した遺物は前章の「炉周辺の遺物」で説明しており、ここでは除外する。その他の包含層出土遺物

第5層の上面にある褐色土層・褐灰色土層から製塩土器・土師器・須恵器・瓦器等が出土している。これらの遺物の中で製塩土器が最も多く出土遺物全体の50%以上を占める。製塩土器はII-B類がほとんどで製塩土器全体の90%以上に及んでいる。その他の遺物は須恵器甕(333.334)・円形の土製品(308)・タコ壺(309)等がある。



第27図 包含層出土遺物4 (1/4)

- 註1 大阪府教育委員会「淡輪遺跡発掘調査概要Ⅲ」
 2 大阪府教育委員会「淡輪遺跡発掘調査概要Ⅳ」
 3 大阪府教育委員会「淡輪・磯山古墳群発掘調査概要」1978
 4 大阪府教育委員会「深日遺跡発掘調査概要」1978
 5 大阪府教育委員会「岬町遺跡群発掘調査概要」第1編・小島東遺跡1977
 6 大阪文化財センター「田山遺跡発掘調査報告書」1982
 7 北村文庫「淡輪の遺跡」1975

第4章 まとめ

今回の調査で山田海岸遺跡は縄文時代から中世にかけての複合遺跡である。中でも古墳時代前期あるいは中期から奈良時代にかけての塩生産に関する遺構・遺物の確認は、紀淡海峡の製塩遺跡を考える上で注目される場所である。検出した遺構は製塩炉をはじめ建物跡、土坑、溝等の製塩に関連するもの、また中世の土坑、溝等である。出土した遺物は弥生式土器、須恵器、土師器、瓦器、製塩土器、土製品、石器等を出土し、中で製塩土器の占める割合が圧倒的に多く、遺物総数の約70%に及んでいる。これらの調査結果を簡単にまとめると、遺跡の立地は、海まで突き出した丘陵に挟まれた狭小な谷に位置し、海面から約4 mの上がった平坦地である。西側には遺跡に隣接して小川が流れ海水、真水ともに簡単に摂取できる位置にある。特に製塩に関する遺構は崖付近の約100㎡に集中する。製塩炉は、層位的にも三時期以上は存在し、形態的には地山を掘り窪めた炉と石敷炉に大きく分かれる。出土した製塩土器の大半は細片で、そのほとんどが口縁部片、体部片である。底部片はわずかに2片しか認められず、底部の廃棄については製塩土器の体部より上方とは分けて考える必要があるかもしれない。以下、今回の調査成果から山田海岸遺跡の変遷（Ⅰ期～Ⅳ期）について述べることにする。

Ⅰ期（土器製塩以前）山田海岸遺跡で土器製塩が行なわれるまでの時期である。当遺跡では、縄文時代の石匙や弥生時代中期の土器等が出土しており、縄文時代から人間が生活していた痕跡が認められる。

Ⅱ期（土器製塩開始）山田海岸遺跡で土器製塩が行なわれる時期であり、44-OHが出現する。この製塩炉は地山を掘り窪めたところを直接使用している。この炉に使用されている製塩土器は製塩土器Ⅰ類に属するものと考えられる。炉の形成時期は古墳時代前期から中期に相当すると考えられる。

Ⅲ期（石敷製塩炉開始）石敷製塩炉（43-OH）が出現する。製塩炉の改良に伴い製塩土器の形態も改良され製塩土器Ⅰ類からⅡ類へと変化を見せる。奈良時代に入ると山田海岸遺跡では土器製塩の全盛期を迎える。製塩炉に使用される石は43-OHより大型化され39～42-OHが出現する。この時期に使用される製塩土器はⅡ-B類が出現し、Ⅱ-A類に比べて製塩土器の占める割合が多くなる。

Ⅳ期（土器製塩消滅期）およそ平安時代以降になると山田海岸遺跡では土器製塩が行われなくなる。耕作地として利用されたと考えられる。



第28図 遺構全体図

製塩土器観察表

番号	分類	法量 (cm)	特徴	色調	胎土	層位
5	I	底径 4.2 残存高2.15	(外面) ユビオエ、所々に黄灰色の付着物	(外面) 7.5Y 8/2灰白色 (断面) 2.5Y 8/2淡黄色 (内面) 2.5Y 5.1黄灰色	1.5mmの長石を含む	第5層 上層
6	I	底径 2.5 残存高2.55	(外面) ユビオサエ (内面) 灰白色の付着物	(外面) 2.5Y 8/3淡黄色 (断面) 2.5Y 8/3淡黄色 (内面) 10Y 8/1灰白色	長石を含む 粗い	第5層 上層
7	I	底径 2.7 残存高 1.6	(内・外面) ユビオサエ、オリーブ灰色の付着物	(外面) 5 Y R 8/2灰白色 (断面) 2.5 Y R 7/6橙色 (内面) 5 Y R 8/2灰白色	長石を含む 粗い	第5層 上層
8	II-A-a	残存高 1.0	(内・外面) 灰白色の付着物	(外面) 10Y 8/4灰白色 (断面) 10Y 8/4灰白色 (内面) 10Y 8/4灰白色	1.0mm以下の長石を含む 粗い	第5層 上層
9	II-A-a	残存高 3.0	(外面) スズ、粘土紐痕、褐灰色の付着物 (内面) 褐灰色の付着物	(外面) 7.5Y 8/6浅黄橙色 (断面) 2.5Y 8/3淡黄色 (内面) 5 Y R 7/6橙色	1.5mmの石英・長石・黒色砂粒を含む	第5層 上層
10	II-A-a	残存高2.15	(内面) 灰白色の付着物	(外面) 7.5Y R 8/3浅黄橙色 (断面) 7.5Y R 8/3浅黄橙色 (内面) 7.5Y R 8/3浅黄橙色	3.0mm以下の長石を含む 粗い	第5層 上層
11	II-A-a	残存高2.55	剝離のため調整不明	(外面) 10Y R 6/1褐灰色 (断面) 10Y R 6/1褐灰色 (内面) 10Y R 5/1褐灰色	1mm～2mmの長石を含む 粗い	第5層 上層
12	II-A-a	残存高 2.4	(内・外面) 灰白色付着物	(外面) 5 Y R 7/4にぶい橙色 (断面) 5 Y R 7/4にぶい橙色 (内面) 7.5Y R 8/4浅黄橙色	1mmの長石・白色砂粒を含む	第5層 上層
13	II-A-a	残存高 2.3	(内・外面) 不明	(外面) 7.5Y R 4/2灰褐色 (断面) 7.5Y R 8/3浅黄橙色 (内面) 7.5Y R 7/2明褐灰色	1mm程度の長石を含む 粗い	第5層 上層
14	II-A-a	残存高2.55	(外面) ユビオサエ (内面) ヨコナデ	(外面) 7.5Y R 5/1褐灰色 (断面) 7.5Y R 7/2明褐灰色 (内面) 7.5Y R 7/2明褐灰色	2mm以下の長石・石英・微細な黒色粒・雲母を含む	第5層 上層
15	II-A-a	残存高 2.7	(外面) 灰色の付着物 (内面) ヨコナデ、灰色の付着物	(外面) 10Y R 8/3浅黄橙色 (断面) 10Y R 8/3浅黄橙色 (内面) 5 Y 5/1灰色	1mm以下の長石・石英・白色砂粒を多く含む 粗い	第5層 上層
16	II-A-a	残存高 2.3	(外面) 灰褐色の付着物 (内面) 褐灰色の付着物	(外面) 10Y R 3/2灰黄褐色 (断面) 10Y R 8/3浅黄橙色 (内面) 10Y R 8/3浅黄橙色	長石を含む 粗い	第5層 上層
17	II-A-a	残存高 2.7	(外面) 黄灰色の付着物 (内面) 灰黄色の付着物	(外面) 5 Y 5/1灰色 (断面) 5 Y 8/3淡黄色 (内面) 5 Y 8/3淡黄色	長石を含む 粗い	第5層 上層
18	II-A-a	残存高 3.6	(内面) 口縁端部・ヨコナデ 下部・ユビオサエ ヨコナデ	(外面) 7.5Y R 7/4にぶい橙 (断面) 7.5Y R 7/4灰白色 (内面) 7.5Y 8/2にぶい橙色	1.5mm程度の長石・石英を含む	第5層 上層
19	II-A-b	残存高 3.0	(内面) 灰オリーブ色の付着物	(外面) 7.5Y 8/2灰白色 (断面) 7.5Y 8/2灰白色 (内面) 7.5G Y 8/2灰白色	長石・白色粒を含む	第5層 上層
20	II-A-b	残存高2.35	(外面) 灰色の付着物 (内面) 黄灰色の付着物	(外面) 7.5Y R 8/6浅黄橙色 (断面) 5 Y 6/1灰色 (内面) 7.5Y 8/2灰白色	長石を多く含む 粗い	第5層 上層